

## 戦後 70 年あの夏

読売読売 8 月 4 日 1 面に宮本憲一先生が写真入りで載っていた。あの夏、私は海軍兵学校に入ったばかりの予科生徒で、「いかに格好良く死ぬか」しか考えない職業軍人の卵だった。(話は 6 面に続く)

台湾の両親と連絡が取れず、独りぼっこの私は 8 月 24 日、山口から無蓋貨車の復員列車に乗り、父の本籍がある石川県を目指した。あの夏が転換点だった。壊滅した街をいくつも通り、原爆が落ちた直後の広島に近づいた。死体を焼く臭いがする。建物も木もない。列車はやがて広島駅で立ち往生した。すると、悲惨な姿をした多くの家族がホームに集まってきた。「俺らも列車に乗せろ」と騒ぎ、小競り合いになった。

夕暮れが近づいていた。全面戦争というのはこういう結果をもたらすのか。都市も生物も消滅する。私はそれが初めてわかった気がした。環境経済学が生涯の課題になるのだが、戦争こそ最大の環境破壊だと考える原点が、あの光景にある。あれから 3 度の転機があった。最初が金沢の旧制第四高等学校(四高)への入学。極貧の生活の中で、初めて懸命に働く貧しき人々を知った。自分の外にある社会のことなど考えもしなかった私は目を開かされ、社会科学に興味を持った。

次の転機は名古屋大学に進んで社会思想史の水田洋先生に出会った時だ。古代から説く先生の雄大な講義を聴き自分の浅薄さに気づいた。「人間の思想には偉大な流れがある。社会運動をするだけではだめだ。研究者になろう」と思った。

転機の三つ目は財政学者として歩き始めた 1961 年、三重・四日市で石油コンビナートからの煙で大変な公害が発生するのを知った時だ。ぜんそく患者の半数が子供や老人。

「玉音放送」の数日前だった。海軍兵学校・防府分校(山口)の庭でベートーベンの交響曲が鳴った。空襲で校舎が壊滅して悄然としていた我々生徒は、「元気をだせ」と教官の一人が寓例のレコー・ドコンサートを聞いてくれたのだ。その気持ちがうれしかった。

あの夏、私は海軍兵学校に入ったばかりの予科生徒で、「いかに格好良く死ぬか」しか考えない職業軍人の卵だった。

### 戦後70年あの夏

## 格好良く死ぬ信じた15歳

環境経済学者 宮本憲一さん 85

昭和20年3月、中学3年生を終えると男子全員が二等兵にさせられた。予科練に行くとになった同級生は駆逐艦に乗せられ、沖繩近海で潜水艦に撃沈されて死亡している。

舞臺の試験を通った我々だけは特別扱いで、途中まで零戦の護衛つきの輸送機で本土にきた。思えば、ひどい差別だが、私には悔れ

の予科練に行って航空兵になれ」「行きたくないなら理由を言え」と説得した教師もいた。

昭和20年3月、中学3年生を終えると男子全員が二等兵にさせられた。予科練に行くとになった同級生は駆逐艦に乗せられ、沖繩近海で潜水艦に撃沈されて死亡している。

舞臺の試験を通った我々だけは特別扱いで、途中まで零戦の護衛つきの輸送機で本土にきた。思えば、ひどい差別だが、私には悔れ

の「海兵入学」だった。それがわずからが月で断切れを迫ったのである。

「天皇陛下の意思に従って学ぶ政略だ」「海軍兵学校は一切の証書を消し、直ちに名前たち全員を故郷に帰す」

熱い日差しが照りつける校庭で聞いた「玉音放送」の内容はよくわからなかったのだが、教官から「お前が、教官からさう告げられた。私はすべての支えを失った。あの時、15歳。」「ゼロからの出発」だった。

〈6面に続く〉

歩くだけで目がチクチクした。--- あれから国内外の多くの公害現場を歩き、日本環境会議などの組織を創設して若い研究者とともに救済や予防の研究を続けた。公害とは、経済成長のシステムを変えない限り生産から廃棄まで経済の全過程で起こる社会的な災害だった。

この70年を振り返る時、高度成長の成果に対する賛辞が多いだろう。だが、その陰で世界を驚かせた公害が起き、公害の克服に生涯をかけた名もなき多くの人々の行動があったことを思い出してほしい。その背景には、基本的人権の尊重、地方自治と司法の独立、言論や報道の自由という民主主義があった。原発事故が起き、アスベスト災害などの課題もあるので、「公害は終わった」とはいえないが、戦後民主主義の力によって多

くの公害を克服した歴史の教訓を忘れてはならない。これが、あの終戦の夏を境にした古い日本と新しい日本の狭間を生き、ゼロから出発した私の願いである。

地球環境を保全し、平和であって多様な歴史と文化を尊重する「維持可能な社会」。それが実現することを願ってやまない。



(2015年8月6日)